言語研究（*Gengo Kenkyu*）**146**: 83–108（2014）

注意概念を用いたソ系の直示用法と非直示用法の統一的分析

平　田　未　季
秋田大学

【要旨】本稿では，2000 年前後から類型論的な指示詞研究に導入された注意概念を用いて，日本語指示詞研究で残された問題とされる「中距離指示」のソ系を分析する。自発的な相互行為場面を見ると，従来「中距離指示」とされてきたソ系は，トルコ語の şu とは対照的に，発話時に聞き手の視覚的注意が向けられている対象，もしくは発話時以前に一度注意が向けられた対象を指す。従って，このソ系は「聞き手の注意の不在」を示す şu とは反対に，「聞き手の注意の存在」を示す形式であると考えられる。şu とソ系は談話・テクスト内でも対照的な分布を示す。ソ系が聞き手が注意を向けうる前方の言語的対象を指すのに対し，şu は発話時にまだ談話に導入されていない後方の言語的対象を指す。この事実は，「聞き手の注意」という概念を用いることで指示詞の直示用法と非直示用法の統一的な分析も可能になることを示唆している *。

キーワード：指示詞，注意（attention），直示用法，非直示用法，トルコ語

1. はじめに

指示詞は，その解釈が発話場面の物理的な文脈に依存する直示用法（deictic use）を持つ直示表現の 1 つである（Anderson and Keenan 1985: 301, Levinson 2004: 97, 108–109）[1]。直示用法の言語類型論的な記述は，Fillmore（1982），Anderson and Keenan（1985）を出発点とする。Fillmore（1982）は，通言語的に指示詞を記述するための道具として，話し手もしくは聞き手の位置である直示中心（deictic center）と，そこからの距離という概念を提示した。Anderson and Keenan（1985）は，世界の言語の指示詞体系をその体系の中に含まれる直示中心と距離の数によって組

* 本研究は，JSPS 科研費（課題番号：26884007）の助成を受けたものである。本稿の執筆に際し，2 名の査読者の方に，数多くの貴重なコメントと改善のための建設的な指摘をいただいた。ここに記して感謝の意を申し述べたい。末澤寧史氏，及び 3 名のトルコ語母語話者の方には，トルコ語のデータについて，議論を通し，有益な意見をいただくことができた。また，本研究を進める上で，指導教員の上田雅信先生から，長年に渡り，多くの意義深い示唆と助言をいただいた。この場を借りて深く御礼申し上げる。ただし，当然ながら，本稿の不備及び誤りの責任は全て筆者に帰するものである。

[1] 指示詞は直示用法の他に，大きく分けて，談話直示用法（discourse deictic use），照応用法（anaphoric use），想起用法（recognitional use）の 3 つの用法を持つ（Diessel 1999: 6, 93, Levinson 2004: 107–109）。これら 3 つの用法のうち，談話直示用法については，先行研究によって定義が異なる。この定義の相違は，談話直示用法を，先行する言語表現の音的な側面を指示する用法として分析するのか，それとも，命題内容を指示する用法として分析するのかという立場の違いに起因する。詳しくは 5.2.2 節で論じるが，本稿では，言語表現の音的な側面も発話場面の物理的な文脈の一部であると考え，先行する言語表現の音的な側面を指示する談話直示用法は直示用法に属するとみなす。

織化した。この直示中心と距離という概念を用いた指示詞記述の枠組みは，後の言語類型論的研究及び個別言語の研究における基本的な枠組みとなった。

これに対し，2000 年前後からいくつかの個別言語の研究で，指示詞の意味記述に距離を中心的に用いることに疑問が呈され始めた。また，85 の言語サンプルをもとに世界の指示詞体系を記述した Diessel（1999, 2006）は，世界の言語の中には距離概念では記述できない指示形式があることを指摘し，認知心理学の知見を背景とした新たな指示詞記述の枠組みを提示した。これらの 2 つの研究は別々に生じたものであるが，共同注意（joint attention），及び注意（attention）という概念を用いた指示詞分析を提案している点において共通している。

本稿では，この注意概念を日本語指示詞の分析に導入し，先行研究で残された問題とされていた「中距離指示」のソ系に対する新しい分析を提案する。この分析により，「中距離」という距離概念を用いた分析では説明できなかったソ系の 2 つの特徴が自然に説明できるだけでなく，ソ系の直示用法と非直示用法を同一の原理に基づいて説明することが可能になる。また，国語学・日本語学の枠組みでは周辺的な用法とされてきた「中距離指示」のソ系を，言語類型論的な枠組みで確立されている指示形式の 1 つとして記述することができる。

注意概念を用いた指示詞研究の大きな特徴はその分析方法にある。従来の距離中心主義的な指示詞研究では二次的なデータに基づく分析が中心であり，その例のほとんどが発話場面の文脈情報を欠く単文であった。これに対し，近年の指示詞研究は，指示詞を記述する概念が実際の発話場面と切り離されて議論されてきたことを批判し，フィールドワークや抽出タスクによって収集したデータに基づき，発話場面の文脈情報を積極的に取り入れた談話レベルの分析を行っている（Özyürek 1998, Burenhult 2003, Enfield 2009 等）。この方法論的改善により，従来の距離概念に加えて，共同注意，聞き手の注意という新たな理論的概念を指示詞の意味記述に用いることが可能になった。

本稿でもこの方法を採用し，自然談話をビデオ録画し，それを文字化したデータを分析のための例として用いる。特定の発話場面における自然談話を分析対象とすることで，主に内省に基づく従来の日本語指示詞研究では扱うことができなかった話し手の指示形式の選択に関わる文脈情報が明らかになるからである。

本稿の構成は以下の通りである。まず 2 節で，「中距離指示」のソ系に対する先行研究の分析とその問題について述べる。3 節では，指示詞分析に注意概念が導入された経緯と，注意概念を用いた代表的な指示詞研究である Özyürek（1998），Küntay and Özyürek（2006）のトルコ語指示詞 şu に対する分析，及び Burenhult（2003）のジャハイ語（Jahai）[2] 指示詞 ton に対する分析を紹介する。4 節では，「中距離指示」のソ系が注意概念を用いて分析可能であることを論じ，最後に 5 節で，この分析の枠組みが非直示用法にも拡張できる可能性を示す。

[2] オーストロアジア語族モン・クメール語派アスリ諸語の下位語派である北アスリに属する。

2.「中距離指示」のソ系

日本語指示詞の直示用法に関する体系的な研究は佐久間（1951）に端を発する。佐久間（1951: 22）は日本語指示詞の直示用法を人称との対応関係から説明し，ソ系は二人称と対応して「聞き手領域」を指すとした。これに対し，高橋（1956），服部（1961, 1968），阪田（1971）等は，ソ系は佐久間（1951）が指摘した「聞き手領域指示」とは異なる「中距離指示」用法を持つと主張した。これ以降のソ系の直示用法の研究は，ソ系が 2 つの異なる用法を持つ多義的な形式であるとする研究と，ソ系の多義性は見せかけであり，両用法は高次では同一の原理に基づくとする研究とに分けられる。

ソ系を多義的だとする代表的な研究として，先述の高橋（1956），服部（1961, 1968），阪田（1971），及び正保（1981）が挙げられる。彼らは（1）のような例をもとに，ソ系の直示用法を全て「聞き手領域指示」に還元することはできないと主張した。

（1）　「聞き手領域指示」と解釈できないソ系の例

a.　話し手と聞き手が向かい合っている場面で，話し手が自分の後方の対象をソ系で指す場合。
（話し手と聞き手が部屋の中で立ち話しをしているとき，話し手が手を後へやって机を指し）「その机をごらん」　（高橋 1956: 56）

b.　話し手と聞き手が並んでいる場面で，話し手が両者からやや離れた対象をソ系で指す場合。
「そこを左へ曲がって」と，きみ子が運転手にいった。（阪田 1971: 130）

阪田（1971）は，小説からの豊富な例をもとに，このソ系は話し手と聞き手から等しく離れた対象を指していると述べ，以下の定義を提示した。

（2）　「中距離指示」のソ系の定義
話し手と相手の勢力圏が相重なった「われわれのなわばり」の外にあるものであり，さほど遠い所ではない場所を表す　（阪田 1971: 129）

これに対し，ソ系の単義的な分析を提案する研究は，「聞き手領域指示」と「中距離指示」を統合するより高次の説明原理を求めた。金水・田窪（1990, 1992b）を始めとする一連の研究は，独り言ではソ系が用いられないという内省に基づいて，「聞き手領域指示」と同様に「中距離指示」も，その使用において聞き手の存在を前提とすることを指摘し[3]，「中距離」は「他の原理（の複合）から生じる見せかけ

[3] 吉本（1992: 111）も，独り言でソ系が使われないこと，また社会的に十分発達していない幼児の言葉にソ系が現れないことを根拠に，「中距離指示」のソ系が「聞き手の存在を前提とする」ことを指摘している。なお，「中距離指示」のソ系と同様に「われわれ」という直示中心が仮定されているア系には，このような傾向は見られない。

これに対し，堤（2012: 155–156）は，内省により，独り言でも「中距離指示」のソ系は使

の意義である」（金水・田窪 1992b: 169）と分析した[4]。金水・田窪（1990, 1992b）は，ソ系の直示用法はどちらも聞き手を介した間接的な指示であるとし，話し手が知覚した対象を直接指示するコ系・ア系とは異なる有標な用法として特徴付けた[5]。

本稿では，金水・田窪（1990, 1992b）が指摘するように，ソ系の 2 つの直示用法は，聞き手を介した間接的な指示を行うという点で統合できると考えるが，それらを全て「聞き手領域」という概念に還元することはできないと主張する。その根拠は，堤（2012）が指摘したア系との交替可能性である。

堤（2012）は，金水・田窪の一連の研究が提唱した枠組みを発展的に引き継いだ

用可能であると述べている。完全な独り言のデータを採取することは困難であるため，本稿では独り言で「中距離指示」のソ系が使用できるか否かについて結論を出すことはしないが，吉本（1992）の指摘通り，指示詞の習得においてソ系の出現が一律に遅れることから，「中距離指示」のソ系もやはり聞き手の存在を前提とする形式であると考える。

[4]「中距離」が見せかけの意義である根拠として，上述の聞き手の存在を前提とすることに加え，金水・田窪（1992b: 169）は以下の 2 点も挙げている。

（i）他の形式とは異なり，「中距離指示」のソ系は「そこ」「そのへん」等場所指示に偏る傾向がある。

（ii）「中距離」とは，「近距離」，「遠距離」が定まった後にのみ「埋め草」として出てくる領域であるため，「近距離」，「遠距離」と同等の意義素として想定するべきではない。

（i）に関する筆者の意見については，注 15 を参照されたい。（ii）に関して，指示詞が距離の対比を最大いくつ含みうるかについては言語類型論的研究で多くの議論がなされている。議論の焦点は，指示詞が ‘proximal’，‘medial’，‘distal’ の 3 つ以上の距離を含みうるか否かという点だが（4 つ以上の距離の対比を含みうるとする研究として Anderson and Keenan（1985: 286–288），3 つが最大だとする研究として Diessel（1999: 40）が挙げられる），少なくとも ‘medial’ が指示詞の意味に含まれうることはどの研究も認めているため，本稿では「中距離」を指示詞の意義素として想定すべきではないという考えには同意しない。

ただし，Levinson（2004: 109）は，世界の指示詞体系には，距離を明確に区分する有標の中距離形式と，より特定的な意味を持つ形式を用いることができない場合に選択される無標の中距離形式があることを指摘している。ソ系が Levinson（2004）の言う無標の中距離形式だとすれば，ソ系はコ系やア系の「埋め草」であるため「中距離」という意義素を想定すべきではないという金水・田窪（1992b）の主張は，日本語指示詞においては妥当である。本稿では，ソ系を含めたこれらの無標の中距離形式は，注意概念を用いて再分析できる可能性があると考える。

[5] 金水・田窪（1990, 1992b）は，ソ系の無標の用法は言語的先行詞を介した非直示的な指示であるとする。以下，彼らの談話管理理論について簡単に紹介する。

金水・田窪（1990, 1992b）は，外的世界と言語表現の中間に，話し手の知識を格納する心的領域を仮定することで，直示用法と非直示用法の統一的な扱いが可能になると論じた。彼らの枠組みでは，この心的領域は，現場で話し手が知覚した知識が含まれる「直接経験的領域」と，談話によって新規に導入された対象が含まれる「間接経験的領域」に二分される。コ系・ア系は「直接経験的領域」に含まれる対象を，ソ系は「間接経験的領域」に含まれる対象を指す。従って，ソ系は本性的に言語的先行詞を介した非直示的な指示を行うが，発話場面で聞き手を対立的に捉えなければならないという有標な場においてはコ系・ア系を用いることができないため，「埋め草」として直示的な指示を行うことになる（金水・田窪 1992b: 187–188）。

しかし，以上の分析はソ系の直示用法を例外的に扱っているため，言語的先行詞を指すソ系と，物理的存在を指すソ系との間に直接的な関連性を持たせることはできない。本稿では，後に述べる通り，注意概念を用いることで両者を同一の原理によって分析できることを主張する。

が[6], 彼らが提示したソ系の直示用法の統合には疑問を呈している。堤(2012)は,「聞き手領域指示」のソ系はア系に置き換えることができないのに対し，従来「中距離指示」とされてきたソ系はア系と交替することが可能であることを根拠として,「中距離指示」のソ系が聞き手の存在を前提としているとしても，それを単純に「聞き手領域指示」と同等に扱うことはできないと述べた。以下の例において「*」はその文が非文法的であることを示す。

(3)　ア系と交替不可能な「聞き手領域指示」のソ系
　　(聞き手が持っているものを指して) { それ /* あれ } 何？

(4)　ア系と交替可能な「中距離指示」のソ系
　　a.　(タクシーの中で)運転手さん, { そこ / あそこ } の角で降ろしてください。
　　b.　ねぇねぇ，今，{ そこ / あそこ } のスーパーで大安売りをやっているよ。
　　(堤 2012: 155)

堤（2012: 155–156）は，内省に基づき，(4) のソ系とア系の選択に関わる要因は，阪田（1971）の定義通り，話し手と聞き手から指示対象までの距離の程度にあることを示唆している。しかし従来の定義と同様に距離概念によってこのソ系を記述すると，金水・田窪（1990, 1992b）が指摘したソ系と聞き手との関わりを説明することができなくなる。これらの点を踏まえ，堤（2012）は，いわゆる「中距離指示」のソ系は，日本語指示詞の統合的な分析において残された問題であるとした。

以上の先行研究の議論から，いわゆる「中距離指示」のソ系は，統一的な説明が困難である以下の 2 つの特徴を持つことが分かった。

---

[6] 堤（2012）は談話管理理論が用いる「直接経験」,「間接経験」という概念の曖昧さを指摘し，より説明力を持つ装置として，話し手が変項として捉えた要素を格納する領域（Wp）と，話し手が映像化しうる特定的な要素を格納する領域（Ws）という区別を導入した。

ただし，堤（2012）の枠組みは，談話管理理論の否定ではなく発展として位置づけられるものであり，両者には共通点も多い。両者の議論を単純化すると，共通点を以下の 3 点にまとめることができる。

(iii) 談話管理理論と堤（2012）の枠組みの共通点
　a. 両者とも，指示詞は心的領域内の対象を指すと考える点，その心的領域を 2 つに分ける点において共通している。ただし，その定義，及びそこに含まれる要素については意見が異なる。
　b. 両者とも，ソ系は間接指示的であると分析しており，そのソ系を用いた指示は，コ系・ア系を用いた指示よりも話し手の言語処理に負担をかけるとしている。
　c. 両者とも，聞き手を語用論的存在とみなし，指示詞の意味記述から聞き手という存在を排除することを目指している。

(iii a, b) については本稿も意見を同じくする。しかし，本稿では，Tomasello（1999: ch. 4）が述べるように，言語の意味は話し手と聞き手の意図伝達の歴史の中で慣習化されていったものであるという立場をとるため，3 番目の，指示詞の意味分析に聞き手を含むべきではないという考え方は共有しない。聞き手の注意という概念を用いてソ系の意味を記述することで，談話管理理論と堤（2012）が課題としてきたソ系の直示用法を，少なくとも談話管理理論の枠組みの中には自然に位置づけることが可能になると思われるが，この点については，独立した問題として扱うべきものであると考えるため，ここでは触れない。

(5)　「中距離指示」のソ系の特徴

a.　その使用において「聞き手領域指示」のソ系と同様に聞き手の存在が前提となる。

b.　「聞き手領域指示」のソ系とは異なりア系と交替可能である。

本稿では，近年の指示詞研究で用いられている注意概念をソ系の分析に導入することで，この 2 つの特徴が統一的に説明できることを示す。具体的な分析は 4 節で行うが，その前に，次節で注意概念が指示詞分析に導入された経緯を簡単に紹介する。

3. 注意概念を用いた指示詞研究

1 節で述べた通り，従来の言語類型論的な指示詞研究は，Fillmore（1982），Anderson and Keenan（1985）が構築した距離中心主義的な枠組みを用いていたが，近年の指示詞研究では，指示詞の意味を記述する概念として距離を中心的に用いることの当否が問い直されている。以下，3.1 節で Diessel（1999, 2006）が提示した注意概念を用いた指示詞分析の枠組みを，3.2 節で注意概念を用いて指示形式の意味を記述した個別言語の研究を紹介する。

3.1. Diessel（1999, 2006）の理論的枠組み

距離中心主義的な直示用法の研究に異を唱えた最も初期の研究の 1 つは，Diessel（1999）である。Diessel（1999）は，距離中心主義的な Anderson and Keenan（1985）の枠組みでは，指示詞体系に含まれる距離中立（distance-neutral）の形式を例外的に扱わざるを得ないことを問題とした [7]。Diessel（1999: 2, 37–38）は，距離中立の形式を含めた全ての指示形式が，その使用において聞き手の注意をひく機能を持つことを重要視し，指示詞を「聞き手の注意を発話場面の対象もしくは位置に向けさせる」機能を持つ形式の集合として再定義した。注意概念を用いたこの定義により，距離中立の形式も含めた指示詞体系の統一的な分析が可能になった。

Diessel（2006）は共同注意という学際的な概念を用い，上の定義に理論的な根拠を与えた。共同注意とは，話し手，聞き手，そして両者が注意を向ける対象の 3 者で形成される 3 項関係に基づく社会的な相互作用であり，認知心理学において人間の言語コミュニケーションの基盤とされている（Dunham and Moore 1995, Tomasello 1995, 1999, Eilan 2005）。Diessel（2006）は，指示詞は言語の中でも共同注意の形成に深く関わる特別な範疇であると述べ [8]，指示詞の中心的な機能とされて

[7] 距離中立の指示形式の例として，フランス語の ce，ドイツ語の dies/das 等，距離的な対立形を持たず発話場面に存在する対象全てを指しうる指示形式，またトルコ語の şu のように距離以外の要因がその使用に関わる形式が挙げられる。これらは，距離概念を中心とする指示詞記述の枠組みでは例外的な存在とされ，特に前者は，指示詞よりもむしろ定冠詞や 3 人称代名詞に近い機能を持つと分析されることもあった（Anderson and Keenan 1985: 280 等）。

[8] その根拠として，Diessel（2006）は指示詞のみが持つ以下の 4 つの特徴を挙げる。(a) 言語類型論的に指示詞はどの言語にも存在する普遍的な範疇である，(b) 通時的に指示詞は他の

きた対象の空間定位よりも重要で第一義的である機能として，（6）の伝達機能を提示した。

（6）　指示詞の伝達機能
　　指示詞は対話相手の共同注意的な焦点を調節するという機能を果たす
（Diessel 2006: 463, 469，日本語訳は筆者による）

言語習得における共同注意の重要性を論じた Tomasello（1999: 63–64, 69）は，共同注意の形成に関わる行動を，（i）何かに向けて対話相手に注意の転換を促す行動と，（ii）何かに対する対話相手の注意に自分の注意を同調させる視線追従行動の 2 つに大きく分けた。この注意の転換と視線追従という区別を踏まえ，Diessel（2006）は，指示詞の伝達機能を以下の 2 つに分けている。

（7）　共同注意の形成における指示詞の 2 つの機能
　　a.　共有されている注意の焦点に入っていなかった対象へ聞き手の注意を向け，新しい注意の焦点を作り出す。
　　b.　聞き手の注意を，現在の（共同注意が確立されている）指示対象から，前に（共同注意が）確立された指示対象へ向けるために用いられる。もしくは現在聞き手の視野に入っている複数の対象から（話し手が）意図する対象を特定するために用いられる。
（Diessel 2006: 470，括弧内，及び日本語訳は筆者による）

英語指示詞 this / here, that / there は，文脈に応じ（7a, b）両方の機能を果たす。（8a）は新しい対象を，（8b）は既に聞き手の視野に入っている対象を指示する例である。

（8）　a.　Look, <u>that's / there's</u> Bill.
　　b.　Here are two books. <u>This</u> one is mine, and <u>that</u> one is yours.
（Diessel 2006: 470）

しかし，英語とは異なり，（7a）聞き手の注意が指示対象に向けられていない場合と，（7b）聞き手の注意が既に指示対象に向けられている場合とで異なる指示形式を用いる言語があることが，2000 年前後からいくつかの個別言語の研究において指摘されている（Özyürek 1998, Burenhult 2003, Küntay and Özyürek 2006 等）。これらの研究は，指示詞の意味記述には，距離概念に加え，指示対象に対する聞き手の注意の有無という対比（contrast）が必要であることを主張した。この聞き手の注意に関わる最もよく知られた指示形式として，トルコ語の şu が挙げられる。次節では şu に対する Özyürek（1998), Küntay and Özyürek（2006）の分析を紹介する。

言語項目に起源を求めることができないほど古くからある，（c）言語習得において指示詞は常に最も早く子どもが習得する語の 1 つである，（d）指示詞は前言語期に共同注意の形成に用いられる指さしジェスチャーと共起することが多い。

3.2. 注意概念を用いたトルコ語指示詞の分析

トルコ語は bu，şu，o の 3 つの指示形式を持つ[9]。Özyürek（1998）及び Küntay and Özyürek（2006）は自然談話の分析や実験に基づき，bu，o がそれぞれ話し手から「近」,「遠」という距離概念をコード化するのに対し，şu はいかなる距離情報も持たないこと，şu は指示詞を含む発話の発話時に聞き手の視覚的注意（visual attention）が向けられていない対象を指すのに用いられることを示した。Küntay and Özyürek（2006: 206）は şu を「聞き手の注意の不在（absence）」を示す形式と呼ぶ。以下に，Özyürek（1998）が提示した şu を含む自然談話データの一部を示す。

（9）　楕円形の物体
（教師と学生が陶器が置かれた机の周りに立っている。学生は教室の隅にある楕円形の物体を指し，それを机の上の陶器に装着することを提案する）

a.　mesela　hoca-m　şu　oval　mesela
例えば　先生-所属 1 人称単数　DEM[10] 決定詞　楕円形の（物）例えば
“sir for example, this/that oval for example”

b.　şu-nun　dış　yüzey-i-ne　koy-up　ta
DEM-属格　外の　表面-所属 3 人称単数-与格　置く-接続形　も
“if you put on this’s outside surface”

c.　on-dan　da　ol-abil-ir
DEM-奪格　も　なる-可能-超越時制
“it might be from that too”

（Özyürek 1998: 606–607，英語は原文ママ，形態分析とグロスは筆者による）

（9a, c）において，話し手は「楕円形の物体」を指すのに şu と o という異なる形式を用いている。従って，両形式を区別する要因は，直示中心から対象までの距離ではない。şu が「聞き手の注意の不在」を示すという Küntay and Özyürek（2006）の分析に基づけば，話し手は，（9a）では聞き手が対象に視覚的注意を向けていないと見なしたために şu を選択し，（9c）では聞き手が既に一度その対象に注意を向けたと判断した結果，話し手から対象までの距離を考慮し，対象が「遠」であることを示す o を用いたと考えられる。（9）のような例に基づき，Küntay and Özyürek（2006）は，トルコ語指示詞は，距離的な対比に加え，指示対象に対する聞き手の注意の有無という対比が形式の選択に関わる分裂体系（split system）であると主張した。

このトルコ語の şu は，先に（7a）として提示した，聞き手の注意を転換させ「新しい注意の焦点を作り出す」（Diessel 2006: 470）ために選択される指示形式である。

---

[9] bu, şu, o はそのままの形で指示代名詞，指示決定詞としても用いられるが，指示語根として，派生接尾辞を伴い，場所を表す代名詞（bura, şura, ora），様態を表す副詞（böyle, şöyle, öyle）等としても用いられる。

[10] 以下の例において ‘DEM’ はそれが指示詞であることを表す。

これに対し，（7b）聞き手の注意が既に指示対象に向けられている場合に選択される指示形式も存在することが先行研究によって明らかにされている。次節では，その例として，Burenhult（2003）によるジャハイ語指示詞 ton の分析を簡単に紹介する。

3.3. 注意概念を用いたジャハイ語指示詞の分析

注意概念を用いた個別言語研究の 1 つである Burenhult（2003）は，ジャハイ語指示詞の中でも，空間情報を示さない指示形式 ton に注目した[11]。彼は，フィールドワークによる観察と抽出タスクに基づき，ton は，Özyürek（1998）が記述したトルコ語の şu とは対照的に，発話場面において聞き手が既に視覚的注意を向けている対象を指す用法を持つと述べた。Küntay and Özyürek（2006）の用語を用いれば，ton は「聞き手の注意の存在（presence）」を示す形式であると言える。Burenhult（2003: 377）は，ton は，聞き手に注意の転換を促さないという点で，ジャハイ語指示詞に含まれる他の形式とは決定的に異なると述べた。

本稿では，日本語指示詞もトルコ語指示詞，及びジャハイ語指示詞と同様に，距離的な対比に加え，聞き手の注意の有無という対比が指示形式の選択に関わる体系であることを主張する。次節では，先行研究において残された問題とされてきた「中距離指示」のソ系が，聞き手の注意という概念を用いて分析できることを論じる。

4. 注意概念を用いた「中距離指示」のソ系の分析

本節では，従来「中距離指示」と記述されてきた，聞き手と話し手からやや離れた対象を指すソ系を，トルコ語指示詞 şu，及びジャハイ語指示詞 ton と対照させながら分析する。分析においては，1 節で述べた通り，発話場面の文脈情報を観察するため，筆者がセッティングした場面における自然談話の一部を例として用いる。

なお，これらの例に含まれるソ系が，「聞き手領域指示」のソ系とは異なることを確認するため，2 節で述べた堤（2012）の議論に基づき，日本語母語話者 3 名にそれぞれの例の文字化データと位置関係を示した図を見せ，ソ系がア系と交替可能かどうか質問をした。結果，全てのソ系がア系と交替可能であるという回答が得られた[12]。この結果は，以下の例に含まれるソ系が，堤（2012: 155–156）が「聞き手領域指示」に単純に還元することはできないと述べた用法であることを示している。

---

[11] Burenhult（2003）によれば，ジャハイ語指示詞は 8 つの指示形式を持ち，そのうち 4 つは発話場面の空間情報を，他の 4 つは注意に関する情報を示している。これらはトルコ語と同様，指示語根としても，そのままの形で指示代名詞，指示決定詞としても用いられる。

[12] 母語話者には，ソ系とア系の交替可能性を判断する手がかりとして，談話参加者と対象の位置関係等の発話場面の空間情報を示した図と文字化した資料のみを提示した。その結果，全ての母語話者が，（11）から（14）に含まれるソ系はア系と交替可能だと答えたが，話し手もしくは聞き手の顔の向き，及びジェスチャー等の文脈情報を限定すると，ア系とソ系どちらかの方がより好ましいと答える者が現れた。これは，発話場面の空間情報以外の文脈情報が彼らの指示形式の選択に関わっていることを示している。

4.1. 発話時に聞き手の視野に入っている対象の指示

先行研究において，「中距離指示」のソ系は，その名が示す通り，話し手から対象までの距離の程度によってア系と使い分けられているとされてきた（阪田 1971，堤 2012 等）。しかし，実際の使用では，同一の対象をア系とソ系両方を用いて指示することがある。その一例として，展望台での談話の一部である（10）を提示する。

（10）　ゼブラ柄のビル

（女性 2 人が展望台の窓の前の隣り合ったいすに座り，正面に広がる景色を見ている。A は共通の友人が住んでいるビルの場所を B に教えようとする）

a.　A:（指さしをしながら）あそこ見て。斜めに森あるでしょ。

b.　B:（A の指さしに合わせて顔を動かす）

c.　A: そこの裏！白黒のゼブラ柄のビル，ゼブラ柄の。

d.　B: え，どれ，どれ？（指さしをしながら）あの鉄塔が近いやつ？

e.　A:（B の方を見た後，正面に顔を戻し指さし）それ！それ！白と黒 … 黒じゃないな，グレーの。B のまっすぐ前。

f.　B: あー，あれ … かなあ。

g.　A:（B の方を見て）そうそう，（顔を正面に戻し）ねずみ色のやつ。それが C ちゃん住んでるんだよね。

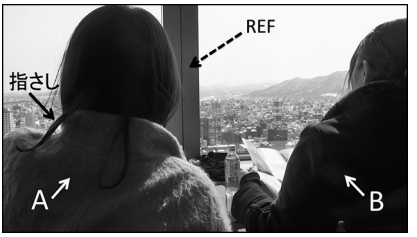

図 1　（10a, b）：A が指さしをし，B は A の指さしに合わせて顔を動かす

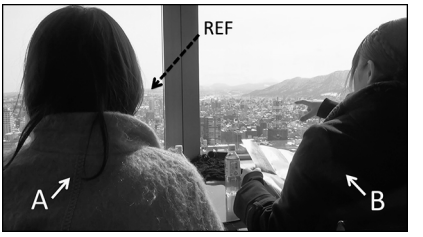

図 2　（10d）：B が指さしをする

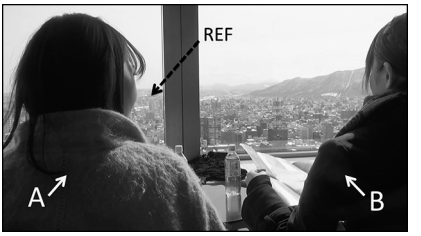

図 3　（10e）：A は B の方を見て B の視線を確認した上で，ソ系を用いて指示

（10a）において，A は意図する対象が含まれる空間をア系を用いて指しているが，その後，（10c）では，指示対象と隣り合っているビルが含まれる空間を「そこ」で指し，（10e, g）では，（10f）で B が「あれ」と指した対象を「それ」で指している[13]。では，このソ系とア系はどのような要因に基づいて選択されているのだろうか。

（10）と同様に，3.2 節で挙げたトルコ語の談話データにおいても，同一の対象を指すのに şu と o という異なる 2 つの形式が用いられていた。これについて Küntay and Özyürek（2006）は，先述の通り，şu と o の選択にはそれぞれ聞き手の注意の有無と距離の「近」，「遠」という異なる対比が関わっていると述べ，şu は発話時に聞き手の視覚的注意が向けられていない対象を指す「聞き手の注意の不在」を示す形式であると分析した。

本稿では，ソ系にも，トルコ語の şu と同様，聞き手の注意という概念が関わっていることを主張する。しかし，（10）におけるソ系の出現環境は（9）における şu の出現環境とは対照的である。（10c, e, g）のソ系は，（9a）の şu とは反対に，ア系等の言語表現やジェスチャーで一度指示されたことにより，指示詞を含む発話の発話時に聞き手の視覚的注意が既に向けられていると話し手が解釈可能な対象を指している。şu とソ系の対照的な分布は，このソ系が şu とは反対に，そしてジャハイ語指示詞 ton と同様に，発話時に聞き手の視覚的注意が既に対象に向けられていることを前提とする「聞き手の注意の存在」を示す形式であることを示している[14]。

---

[13] 特に（10g）の「それ」は，先行する言語的先行詞を指す非直示用法と説明されるべきだという主張が可能かもしれない。しかし，A が眼前にある対象を非直示用法のソ系を用いて指示していると解釈することは，直示によって指示を行うことができるなら，非直示よりも，話し手にとって負担の軽い直示による指示が優先されるという日本語における「直示優先の原則」（金水・田窪 1992b: 187–189）に反することになる。以下の（11）から（14）の例におけるソ系も同様の解釈により直示用法であると判断する。ただし，本稿では，5.2 節で論じる通り，両者は連続性を持つと考える。

[14] Levinson（2004）は，şu とソ系の用法について以下のように言及しているが，そのソ系に関する記述は本稿とは異なる。

（iv）Levinson（2004）のトルコ語 şu と日本語ソ系に関する記述

「（前略）şu は共同注意の不在を仮定し，文脈における指示対象に聞き手の注意を向けるために用いられる。同じことは日本語についても言える。ソは 2 つの機能を持つ。1 つは単に聞き手に近い指示対象を指し，もう 1 つは（トルコ語の şu と同様に）聞き手の注意を新しい指示対象にひきつける。この後半の用法は，指示対象が話し手にとても近いときコに取って代わられ，話し手と聞き手両方から遠いときはアに取って代わられる。ここでの主な対立は，話し手対聞き手への近接性ではなく，注意の焦点を共有しているか否かに関係している」（Levinson 2004: 110，日本語訳，及び括弧内と下線は筆者による）

本稿でも Levinson（2004）が述べる通り，距離ではなく，話し手と聞き手が「注意の焦点を共有しているか否か」が話し手のソ系の選択に決定的に関わると考えるが，şu とソ系がどちらも「聞き手の注意を新しい指示対象にひきつける」という点には同意できない。その根拠は，4.1 節と 4.2 節の例が示すように自然談話におけるソ系と şu の出現環境が対照的であること，及び 5 節で論じるように両者が非直示用法においても対照的に用いられることである。ただし，Levinson（2004）がソ系の記述の参考にした Özyürek and Kita（2002）が入手できていないため，彼らがどのような根拠によりソ系が şu と同じ機能を持つと判断したのかは未確認である。

このように，日本語指示詞もトルコ語と同様，距離と聞き手の注意という異なる概念が関わる分裂体系であると考えると，その帰結の１つとして，堤（2012）が指摘したソ系とア系が交替可能であることが自然に説明できる。「遠」という空間情報に基づき選択されるア系と，聞き手の注意の状態に基づき選択されるソ系は排他的な関係にはないことが予測されるからである。ア系とソ系のどちらで対象を指示するかは，対象に関する空間情報と聞き手の注意に関する情報のどちらが，聞き手に対象を特定させるために，すなわち共同注意を確立するためにより有効かという，話し手の個々の文脈の解釈により決定される。例えば，（10d, f）で，B は既に A の視野に入っている対象をソ系ではなくア系で指示しているが，これは，（10d, f）の文脈では，対象が「遠」であるという情報の方が，聞き手が注意を向けているという情報よりも，共同注意の確立により寄与すると B が解釈したことを示している。

では，なぜ（10d, f）の文脈では，「聞き手の注意の存在」を示すソ系は共同注意の確立に寄与しないと B は解釈したのだろうか。以下，（10d, f）それぞれについて，B がソ系を選択しなかった要因を考察する。

まず，話し手が「聞き手の注意の存在」を示すソ系を選択する場合，発話時に，聞き手が指示対象に正確に視覚的注意を向けていると解釈できなければならない。（10d）の発話時には，指示対象である「鉄塔」に関する情報が先行する談話の中で与えられていない。また，両者が見下ろす風景の中には指示対象の候補となりうる建造物が数多く存在する。（10d）以前の談話で「鉄塔」に関する情報が十分に与えられており，A が正しい対象に既に注意を向けていると B が判断しうる文脈（（10d’）），もしくは視野の中に指示対象の候補となりうるものが１つしかないような文脈（（10d”））では，ソ系が選択されやすいことが予測される[15]。

（10d’）（何度も鉄塔の場所を指示した後で指さしと共に）
　　だから，その鉄塔だって。
（10d”）（眼下に鉄塔に当たるものが１つしかない文脈で指さしと共に）
　　その鉄塔が近いやつ？

次に，（10f）でソ系が選択されなかった理由について考察する。（10f）の発話時

[15] 上の議論の帰結として，「聞き手の注意の存在」を示すソ系が，特定の質的範疇に偏る傾向があることが予測される。話し手にとって聞き手の注意が向けられているか否かが特定しやすい対象，すなわち，視野の中の特定の１つの対象ではなく，広がりのある空間を指す場合，「聞き手の注意の存在」を示すソ系が現れやすいのではないだろうか。

乳児の発達に伴う共同注意行動の質的変化を観察した大藪（2004: ch. 2）は，乳児が他者の視線追跡をする場合，他者の視線の先の空間を共有することは容易だが，さらにその先の対象物を特定することは困難であると述べ，対象の性質によって視線追従の難易度に差があることを指摘した。実際に，注４に示した通り，金水・田窪（1990, 1992b）は，本稿が「聞き手の注意の存在」を示すソ系と解釈する「中距離指示」のソ系は，「そこ」「その辺」という，視線追従が容易な，場所を表す指示代名詞として用いられやすい傾向があることを指摘している。従って，（10d, f）の発話も，ソ系を場所代名詞に置き換えれば，（10d, f）の文脈でもソ系がより選択されやすくなると思われる。

には先行する談話で指示対象に関する情報が十分与えられているにも関わらず，「あー，あれ … かなあ」を，「あー，それ … かなあ」と言い換えることは，直感的に不自然であるように感じられる。この不自然さは，基本的に内言に用いられる終助詞「かなあ」が後接していることによると思われる。先述の通り，金水・田窪（1992b: 169）は，本稿が「聞き手の注意の存在」と解釈する「中距離指示」のソ系が内言で用いられにくいことを指摘している。（10f）は，以下のように，聞き手の存在を前提とする疑問文にすれば，より自然に感じられる。

（10f'）（聞き手の方を見て，対象を指さしながら）あー，それ？

以上のように，ソ系を含め，指示詞の直示用法の容認性を判断する場合，発話場面の物理的な文脈情報や一連の談話における言語的な文脈情報，また指示形式が含まれる発話のタイプを含めて判断することが重要であると思われる。

次に，（10）と同様の例として（11）を提示する。ただし，（11）では，話し手は，（10）のような先行する言語表現やジェスチャーによる指示なしに，意図する対象を直接ソ系を用いて指している。

（11）スクリーン

（C と D は，正面のスクリーンに映し出された写真を見ながら，その写真の建造物をブロックで組み立てるという課題を行っている。D が白いブロックが足りないと言い，C が写真と同じ色のブロックを使う必要はないと答える）

a.　C:　色一緒じゃなくてもいいって言ってたもん。

b.　D:　（顔を上げてスクリーン見ながら）あ，そうか，あ，そうなのか。（顔を下に向けて手元を見る）

c.　C:　言ってたよ。

d.　D:　（スクリーンを見上げて）そうか。

e.　C:　（D をちらっと見て，すぐに顔を手元に戻し）なんかそれを見て，（D が顔を手元に下げるのを待ってから）っぽくすればいいんだよ。

図 4　（11e）：C は D の方をちらっと見て発話

図 5　C, D と指示対象であるスクリーンの位置関係

（11）は，（10）とは異なり，「それ」を含む（11e）以前の一連の談話において，指示対象であるスクリーンを指す言語表現やジェスチャーが見られない。ただし，（11e）で，話し手であるＣは，聞き手であるＤの方に顔を向け，Ｄが意図する対象に視覚的注意を向けていることを確認した上で，「それ」という指示を行っている（図４参照）。加えて，聞き手の視野の中に指示対象の候補となりうる建造物が多く含まれる（10）とは異なり，（11）の発話場面では，聞き手の視野の中で指示対象の候補となりうるものはスクリーンのみである（図５参照）。このように，意図する対象にＤが既に視覚的注意を向けていることが確認可能である，加えて指示対象の候補となりうるものが他にないという文脈情報が，先行する言語表現やジェスチャーを用いずに，指示対象を直接「それ」と指すことを可能にしたと考えられる。

次の（12）も，話し手が，先行する言語表現を用いずに，聞き手が視覚的注意を向けていると解釈できる対象を，ソ系で直接指示している例である。

（12）　英語の教室
（語学学校の教室の中で机を挟んでＥとＦが向かい合って座っている）
a.　E:　明日英語ある？
b.　F:　（うなずいて）うん，ある。
c.　E:　英語の教室どこ？
d.　F:　（Ｅに視線を向けたまま，自分の後方を指さし）そこ。

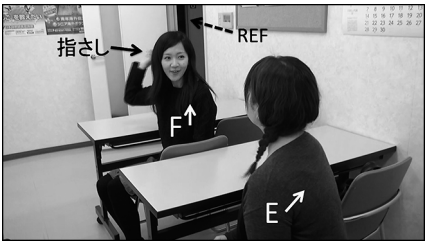

図６　（12d）：聞き手Ｅに視線を向けたまま
後方の教室を指さす

話し手と聞き手が横に並んでいる（10），（11）と異なり，（12）では話し手と聞き手は対面しており，指示対象は話し手の後方にある。（12）の発話状況を聞き手の注意という観点から見ると，話し手は聞き手と対面しているため，常に聞き手の視覚的注意の状態をモニターすることができる。さらに，このような対面状況で聞き手が話し手に顔を向けている場合，話し手の後方にある指示対象は，必然的に聞き手の視野に含まれる。その結果，（12）では，（10a）のようなア系等の言語表現による対象への聞き手の注意の誘導，また（10e, g），（11e）のように話し手が聞き手の視覚的注意を確認するために顔の向きを変える動作が見られない。このように話

し手と聞き手が対面しており，結果として話し手が聞き手の視覚的注意の状態をモニターしやすい状況では「聞き手の注意の存在」を示すソ系が現れやすいことが予測される。実際に,「聞き手領域指示」に還元できないソ系の例として, 最も初期に, 高橋（1956）が提示した（1a）のソ系の発話場面は, 上の（12）と同じ状況である。

以上，本節では，発話時の聞き手の視覚的注意を利用したソ系による指示の例を挙げた。これらのソ系は, 3.3 節で紹介した ton と同様に,「現在聞き手の視野に入っている複数の対象から（話し手が）意図する対象を特定する」（Diessel 2006: 470）機能を果たしている。しかし，Diessel（2006），及びジャハイ語指示詞 ton を分析した Burenhult（2003）は,「聞き手の注意の存在」を示す形式は，発話時に聞き手の注意が向けられている対象だけでなく，発話時以前の聞き手の注意を利用した指示をも行うことを指摘している。次節では，彼らの記述とソ系の例をもとに，発話時以前の聞き手の注意を利用したソ系の用法について述べる。

4.2. 発話時以前の聞き手の注意を利用した指示

Burenhult（2003: 367）は，フィールドワークによる観察から，ジャハイ語指示詞 ton は発話時に聞き手が注意を向けている対象のみならず，発話時以前に聞き手が一度注意を向けた対象をも指すと記述した。Burenhult（2003: 376–378）によれば，これらの用法は，どちらも聞き手の注意の大きな転換を促さないという点で共通している。前者は「今見ている対象から目をそらすな」という指令であり, 後者は「先ほどまで見ていた対象に注意を戻せ」という指令である。これらの指令は, 例えば, 話し手が「遠」と認知した対象に向けて聞き手の注意を転換させる遠称の形式とは異なり，共同注意の確立のために要求される聞き手の負担が軽いという話し手の見込みを伝えていると思われる。Burenhult（2003）は発話時以前の聞き手の注意を利用した ton の例を提示していないが，筆者の収集したデータの中にはこれと同じ例だと考えられるソ系の使用が見られる。以下にその 1 つである（13）を提示する。

（13）　ネイルサロン
（喫茶店の中で，G と H は向かい合って座って話している）
a.　G:　北海道はこれから桜咲くね。
b.　H:　（何度も頷いて）ああ，そうだよね。
c.　G:　（一緒に頷きながら）うんうん。（H が頷きをやめてから）楽しみに。
d.　H:　（G から目をそらして）あー，うん。楽しみだ。（G に目線を戻す）
e.　G:　（目線を落とし H の爪を見て）ネイルきれいだね。
f.　H:　（うなずいて自分の爪を見て）そうね，かわいいよね。
g.　G:　（H の爪を見たままうなずいて）うん，うん，かわいらしいよ。どこでやったの？
h.　H:　これねー，（顔を上げて G を見て自分の後方を指さし）そこだよ。
i.　G:　（顔を上げてから，H が指さす先を見る）

図 7　（13a–c）：G と H は向かい合って話している

図 8　（13e–g）：G と H は H の爪を見ながら話す

図 9　（13h）：H は顔を上げて後方を指さそうとする

図 10　（13i）：G は顔を上げ，H の後方に視線を向ける

G と H は（12）と同様に向かい合って座っており，（13h）で H は（12d）と同じように正面を向いたまま自分の後方の空間を「そこ」と指示している。しかし，「そこ」の発話時に聞き手である G が視覚的注意を向けている対象は，H の後方ではなく，図 9 が示す通り，H の爪である。従って，このソ系は（12）及び 4.1 節で提示した他の例とは異なり，発話時に聞き手の視野に入っている対象を指してはいない。

ただし，図 7 が示す通り，G は，H の爪に目を落とす（13e）より前は，一貫して H の方に顔を向け続けていた。そのため，G と対面していた H は，（13d）までは H の後方の空間が G の視野に入っていたことを確認することが可能であった。このように，G が，（13e）で一時的に視線を落としたものの，（13d）以前の一連の談話が進行する間は H 及び H の後方に視覚的注意を向け続けていたことから，H は，指示対象である H の後方の空間が，発話場面における他の空間よりも G にとって卓立性があると解釈し，G が発話時に指示対象を見ていなくてもその特定は容易であろうという判断のもと，ソ系を選択したと思われる [16]。実際に，H が（13h）

[16] 査読者から，このソ系の指示範囲には制限が必要ではないかという指摘があった。筆者は，ソ系の指示対象の候補は時間的に無限にさかのぼるわけではなく，このソ系の指示においては，指示対象に聞き手が注意を向けた時点と，ソ系を含む発話の発話時が近接していることが必要であると考える。

認知科学における注意研究の出発点とされる Broadbent（1958）が知覚容量のボトルネック理論を提出して以来，その理論は修正されつつも，注意とは，知覚した情報を選択しワーキングメモリに登録するプロセスであるということ，そしてワーキングメモリの容量には限界があることは，認知科学，及び認知心理学における注意に関する議論で前提として共有され

で「そこ」と発話すると，G はすぐに顔を上げ，H の後方に視覚的注意を戻している。G が H の「先ほどまで見ていた対象に注意を戻せ」という指令を正しく理解できた背景には，当然 H の指さしジェスチャーも関係していると考えられるが，指示対象である H の後方の空間が，ある程度の時間に渡って視覚的注意を向けていた対象であったことから，G にとって，発話場面における他の空間よりも卓立性があったことも寄与していると思われる。

次に，発話時以前の聞き手の注意を利用したソ系のもう 1 つの例として，小説から（14）を提示する。

（14）　マンションの前の道

（マンションの部屋に猿の化身が現れ，その部屋の中にいる人々に対し，先ほど部屋から逃げた男の行方について話し始める）

「さっきの男，○○さんでしたっけ，車を走らせて逃げましたけどね，また戻ってきますよ。そろそろガソリンがなくなるのですが，深夜営業のスタンドは限られます。ほら，このマンションの前の通りを行けば，そのスタンドに着きますから。あ，考えれば，勉斗雲は燃料いらずで，エコですね。まあ，それはさておき。とにかく，この前の通りを走ってきます」

わたしはじっと聞くだけだった。

猿の化身は引き続き，喋りつづける。饒舌で，時折，歯を鳴らすような音を立てる。それから，部屋の壁に掛けられた時計を指さした。「あと，三十分後，その道に来ますよ」　（伊坂幸太郎『SOS の猿』，下線部は筆者）

（14）において，「その道」の発話時に聞き手が視覚的注意を向けている対象は，その直前に話し手である猿の化身が指さした「部屋の壁に掛けられた時計」であると予測される。しかし，猿の化身は発話時に聞き手が視覚的注意を向けていないマンションの前の道を「その道」と指示している。従って，このソ系も（13）同様，発話時以前の聞き手の注意を利用した指示である。

ただし，（13）では，聞き手は発話時以前にある程度の時間に渡って指示対象に視覚的注意を向けていたのに対し，（14）では，聞き手が指示対象である「道」に注意を向けていた時間は短い。しかし，その代わりに，（14）では，下線部が示す通り，先行する談話において「道」は，言語表現によって二度明示的に指示されている。

Diessel（2006: 470）は，先に提示した（7b）において，指示詞は「聞き手の注意を，現在の（共同注意が確立されている）指示対象から前に（共同注意が）確立された指示対象へ向ける」機能を持つと記述した。この（14）の例でも，言語的な言及に

ている（Mole 2011 も参照）。その容量の定量化については未だに明確な議論が行われていないが，容量に限界があるという議論は，ソ系が利用できる発話時以前の聞き手の注意は時間的に近接している範囲に限られるという本稿の仮説の理論的な根拠になりうると思われる。

よって「道」に対する共同注意が話し手と聞き手の間で一度確立したことにより，4.1 節で挙げた例のように発話時に聞き手が対象に視覚的注意を向けていなくても，また（13）のように発話時以前に聞き手の注意が対象に向けられていた時間がそれほど長くなくても，聞き手は「道」を容易に特定できると話し手は解釈し，その結果，ソ系が選択されたと考えられる。

以上，発話時以前の聞き手の注意を利用した指示を行うソ系の例を 2 つ挙げた。このソ系による指示を選択する場合，話し手は，聞き手が発話時に意図する対象に視覚的注意を向けていなくてもそれを容易に特定できると解釈できなければならない。本節では，そのような話し手の解釈を可能にする要因として，（13）で発話時以前に聞き手が一定の時間に渡り対象に視覚的注意を向けていたという物理的な文脈情報を，（14）で発話時以前に対象が言語表現を用いて指示されていたという言語的文脈情報を提示した。聞き手が指示対象を容易に特定できると話し手が解釈することを可能にする文脈要因は以上の 2 つに限られない可能性があるが，上述の通り，Burenhult（2003）は発話時以前の聞き手の注意を利用した ton の例を挙げておらず，また筆者が収集したデータの中でも，発話時に聞き手が注意を向けている対象を指すソ系の例に比べ，発話時以前の聞き手の注意を利用したソ系の例は数が少ない。今後さらにデータを収集していく必要がある。

4.3.「聞き手の注意の存在」を示すソ系

4.1 節と 4.2 節の議論に基づき，話し手が，聞き手の注意が存在すると解釈しうる発話場面の状態を以下のように定義する。

（15）「聞き手の注意の存在」の定義
指示詞を含む発話の発話時に話し手が意図する対象に聞き手が視覚的注意を向けている，もしくは発話時以前に聞き手が視覚的注意を向けており，かつ，その対象の特定が聞き手にとって容易であると話し手が解釈できる状態。

従来「中距離指示」とされていたソ系を（15）の文脈で選択される形式と定義することで，2 節の（5a, b）で提示した，「中距離指示」のソ系に関する 2 つの特徴を統一的に説明することが可能になる。以下に（5a, b）を（16）として再掲する。

（16）「中距離指示」のソ系の特徴
a.　その使用において「聞き手領域指示」のソ系と同様に聞き手の存在が前提となる。
b.　「聞き手領域指示」のソ系とは異なりア系と交替可能である。

まず（16a）については，このソ系が距離情報ではなく，対象に対する聞き手の注意の有無という文脈情報に基づいて用いられる形式だと考えることで説明が可能になる。このソ系を使用する場合，話し手は，発話場面で聞き手の視覚的注意の状態を確認し，それが意図する対象に向けられている / いたと解釈できなければなら

ない。そのため，このソ系の使用においては聞き手の存在が前提となるのだと考えられる。

（16b）についても同様に，このソ系が「聞き手の注意の存在」を示すと考えることで説明が可能になる。4.1 節で述べた通り，本稿では，ア系とソ系にはそれぞれ距離と聞き手の注意という異なる概念が関わっているため，話し手は，発話場面の解釈によって，同一の対象をア系で指すかソ系で指すか選択することができると考える。これに対し，「聞き手領域指示」のソ系は，対象が聞き手に「近」であることを示すため，対象が話し手と聞き手から「遠」であることを示すア系と矛盾する概念を含むことになり，堤（2012）の指摘通り，ア系と交替できない。

以上，日本語指示詞の分析に注意概念を導入することで，先行研究で残された問題とされていた「中距離」という記述を廃し，その 2 つの特徴を統一的に説明することができるということを論じた。

なお，4.2 節で，（14）の例をもとに，このソ系が，言語表現を伴う指示により発話時以前に一度共同注意が確立した物理的対象を指すことを示したが，この用法は，直示用法と非直示用法の連続性を考える上で非常に重要である。次節では，注意概念によってソ系，及び şu の直示用法と非直示用法が統一的に分析できる可能性について論じる。

5. 注意概念を用いた直示用法と非直示用法の統一的分析

5.1. 談話・テクスト内における注意概念の解釈

1 節，及び 2 節で紹介した近年の個別言語の指示詞研究はフィールドワークによる観察を出発点とするため，その分析対象は主に直示用法であり，聞き手の注意の有無に関わる指示形式が談話・テクスト内でどのように機能するかという経験的な研究はまだ行われていない。聞き手の注意という概念が指示詞の直示用法だけでなく非直示用法及び定性（definiteness）という概念にも関与しているであろうことは指摘されているが，その具体的な分析は今後の課題とされている（Burenhult 2003: 367, Küntay and Özyürek 2006: 319 等）。

一方，理論的研究では，注意概念を発話場面から談話世界へ拡張することが可能だということが既に論じられている。Diessel（2006: 481）は，指示詞の非直示用法も，直示用法と同様，対話相手の共同注意的な焦点の調節という心理的メカニズムに基づいているとした上で，発話場面では物理的な対象への視覚的注意と解釈される聞き手の注意という概念は，談話・テクスト内では言語的な対象に向けられる注意として解釈されると述べた。

本節では，この Diessel（2006）の主張に基づき，直示用法と連続性を持つとされる談話直示用法におけるソ系と şu の用いられ方を，トルコ語指示詞の非直示用法を分析した林（1985, 1989）に基づいて対照させる [17]。これによって，個別言語の

[17] ジャハイ語指示詞の非直示用法に関する研究は，現時点では見当たらないため，以下の議

研究が今後の課題としてきた，注意概念を用いた非直示用法の具体的な分析事例が提示できると同時に，Diessel（2006）の主張を裏付ける経験的証拠を示すことができる。

5.2. 聞き手の注意の有無を示す指示形式の談話直示用法

5.2.1. 聞き手の注意の平行的解釈の仮説

4.2 節で，（14）の例に基づき，「聞き手の注意の存在」を示すソ系は，発話時以前に一度共同注意が確立した物理的対象を指すことを示した。Diessel（2006）の枠組みを用いて，物理的対象に向けられる聞き手の視覚的注意を言語的対象へ向けられる注意へ拡張すると，ソ系は，発話時以前に一度共同注意が確立した言語的対象，すなわち，既に先行文脈に導入済みの言語的対象を指しうることになる。このように仮定すると，発話場面でソ系と対照的な指示を行うトルコ語指示詞 şu は，談話・テクスト内でもソ系とは反対に，発話時に文脈に導入されていない言語的対象を指すことが予測される。

以上の考察をもとに，本稿では Diessel（2006）の主張の一つの具現化として（17）の仮説を提案する。

（17）　聞き手の注意の平行的解釈の仮説

a.　「聞き手の注意の存在」を示す形式は，談話・テクスト内では指示詞を含む発話の発話時に先行文脈に既に導入されている言語的対象を指す。

b.　「聞き手の注意の不在」を示す形式は，談話・テクスト内では指示詞を含む発話の発話時にまだ先行文脈に導入されていない言語的対象を指す。

この仮説をソ系と şu の談話直示用法を用いて検証する[18]。

5.2.2. 談話直示用法の定義

談話直示用法の定義は研究者により異なる。Levinson（1983: 85, 2004: 108–109）は，談話直示用法は（18）のように言語の物理的側面である音の連鎖を指示する用法であるとしている。これに対し，Diessel（1999: 101–102）は，談話直示用法を（19）のような命題内容に対する指示と定義している。これは，Levinson（2004）の枠組みでは，非直示用法に分類される。

論に ton は含まない。

[18] 注 1 で紹介した談話直示用法，照応用法，想起用法の 3 つの用法の内，発話時の前後両方の言語的対象を指すことができるのは談話直示用法のみである（Diessel 1999: 102–103）。本稿の仮説では，指示対象が発話時に既に談話・テクストに導入済みか否かを問題にしているため，その検証において，前後両方の言語的対象を指しうる談話直示用法を用いる。また後述するように，談話直示は直示用法と非直示用法の境目に位置する用法であるため，両者の連続性を分析するのに適している。

（18）　Levinson（1983, 2004）の定義による談話直示用法

a.　You are wrong. That's exactly what she said.

b.　It sounded like this: Whoosh.　（Levinson 2004: 108）

（19）　Diessel（1999）の定義による談話直示用法

a.　….That was the funniest story I've ever heard.

b.　I bet you haven't heard this story. ….　（Levinson 1983: 85）

（20）　先行研究における談話直示用法の位置づけ（破線は用法間の連続性を表す）

本稿の分類	直示用法		非直示用法	
指示対象	物理的対象	音の連鎖	命題内用	先行詞
Levinson（1983, 2004）	直示用法	談話直示用法	中間的な用法	照応用法
Diessel（1999）	外部照応用法（exophoric use）		談話直示用法	照応用法

このように，先行研究は談話直示の指示対象については意見が異なるものの，談話直示が指示詞の直示用法と非直示用法の境目に位置し両者の連続性を示す用法であるという点では意見が一致している。

本稿では，Diessel（1999）が談話直示用法とし，Levinson（1983, 2004）が談話直示用法と照応用法の中間的な用法であるとした，より非直示的な（19）のような例におけるソ系と şu の用いられ方を対照させ，（17）の仮説を検証する。

5.2.3. 仮説の検証

トルコ語指示詞の非直示用法を分析した代表的な研究として林（1985, 1989）が挙げられる。林（1985: 56–57, 1989: 98–99）は，şu は，発話場面では，対象の存在に聞き手が気付いていないと話し手が判断した対象を指し，談話・テクスト内では，未だ談話に導入されていない対象を指すと述べている。şu に対する林（1985, 1989）の観察は，Özyürek（1998），Küntay and Özyürek（2006）の注意概念を用いた分析と共通点を持つと同時に[19]，直示用法にとどまらず，談話・テクスト内の şu の用法についても言及している点で，トルコ語指示詞の直示用法と非直示用法の統一的な分析の可能性を示した先駆的研究であると言える。

林（1989）は，（19）のように命題内容を指す談話直示用法と解釈できる例を挙げ，şu の bu, o とは異なる性質を記述している。以下，林（1989）の例とそれに対する分析に基づき，şu とソ系の談話直示用法を（21）前方の言語的対象への指示と（22）後方の言語的対象への指示に分けて対照させる。

[19] 林（1985: 56–57）は，şu について，聞き手が「注意を払っていないと話し手が見做した」対象を指すとも記述している。林（1985）が「注意」という用語を用いていることは興味深いが，林（1989: 98）では，発話場面における şu の指示対象は「聞き手が気付いていない」対象とされており，「注意」に関する記述は削られている。

（21）　前方の言語的対象を指す談話直示用法

Bugün　ders　yok-muş　ama,
今日　授業　ない-伝聞　が
{bun-u / *şun-u}　hiç　bil-mi-yor-du-m.
DEM-対格　全く　知る-否定-状態-過去-1人称単数
「今日は授業がないそうですが, 私は｛それ / これ｝を全く知りませんでした」

（22）　後方の言語的対象を指す談話直示用法

Hasan-a　{bun-u / şun-u}　söyle-yeceğ-im,
ハサン-与格　DEM-対格　言う-未来-1 人称単数
“Anne-n-i　meraklan-dır-ma.”
母-所属 2 人称単数-対格　心配する-使役-禁止 2 人称単数
「ハサンに｛*そう / こう｝言うつもりです。『君の母親を心配させるな』」
（林 1989: 100，容認性判断及び形態分析とグロスは筆者による）

林（1989: 99）によれば，トルコ語指示詞で前方指示を行いうるのは bu であり [20]，şu は決して用いられない。一方，日本語指示詞の場合，前方指示においては，（21）が示す通り，コ系も用いられるが，多くの先行研究でソ系が無標の形式だとされている（金水・田窪 1990, 1992b, 金水 1999 等）。

これに対し，後方指示では，（22）が示すように，日本語指示詞ではコ系のみが用いられ，ソ系は決して用いられない。一方，林（1989: 99–100）は，トルコ語指示詞では発話の後に続く内容を指す場合，基本的に şu が用いられると述べる [21]。

談話直示用法におけるこのソ系と şu の対照的な分布は（17）の仮説を支持する [22]。

---

[20] なお，（21）では遠称の o も使用可能である。トルコ語指示詞の研究で，非直示用法における bu と o の違いを論じたものは少ないが, その 1 つとしてバルプナル（2012）が挙げられる。バルプナル（2012: 104–105）は話し手の「管理可能性」という観点から，言語的対象を指す場合の bu と o の違いを論じているが，本稿の分析対象は şu であるため，ここでは詳しく触れない。

なお，バルプナル（2012）は，物理的対象を指す bu, şu, o についても言及しており，その選択には「共通の空間」と「聞き手の認識」という概念が関わると論じている。距離概念を用いないバルプナル（2012）の記述は興味深いが，彼は，言語的対象への指示と物理的対象への指示に異なる概念が関わるとしているため，両者を同一の原理によって説明しようとする本稿の分析とは立場が異なる。

[21] ただし，林（1989）の記述とは異なり，3 名のトルコ語母語話者に対する質問紙を用いた調査では,（22）の文脈では şu と bu のどちらも可能であるとの結果が得られた。従って,（22）における bu の使用は可能であると仮定する。

[22] ここでは詳しく述べないが，照応用法においてもソ系と şu は対照的に用いられる。日本語指示詞ではソ系が照応を中心的に担うのに対し，トルコ語指示詞で照応用法を持つのは o, もしくは bu であり，şu は，照応用法は一切持たない。なお，ソ系と同様「聞き手の注意の存在」を示すジャハイ語 ton は，ソ系と同じく照応用法を持つ（Burenhult 2003: 366–367）。

（23）　談話直示用法におけるソ系と şu の分布

	日本語	トルコ語
前方の言語的対象を指示	ソ系 / コ系	*şu / bu
後方の言語的対象を指示	*ソ系 / コ系	şu / bu

以上の結果は，şu が「聞き手の注意の不在」を示すのに対しソ系は「聞き手の注意の存在」を示すという本稿の主張を裏付けると同時に，聞き手の注意という概念を用いることで直示用法と非直示用法の統一的な分析が可能になることを示している。

6. まとめと今後の展望

以上，本稿では，日本語指示詞分析に注意概念を導入し，国語学・日本語学で「中距離指示」とされてきたソ系が，「聞き手の注意の存在」を示す形式として分析できることを論じた。この分析により，金水・田窪（1992b: 169）が「他の原理（の複合）から生じる見せかけの意義である」とした「中距離」という記述を廃することができると同時に，このソ系が持つ聞き手との関わりとア系との交替可能性という 2 つの特徴を統一的に説明することが可能になる。

また，5 節で論じた通り，Diessel（2006）の枠組みを用いることで，「聞き手の注意の存在」という記述を非直示用法にも拡張しうる可能性が提示された。5.2 節で示した談話直示用法におけるソ系と şu の対照的な分布は，聞き手の注意という単一の原理によって直示用法と非直示用法が統一的に分析できることを示唆している。

さらに，注意概念を用いた以上の分析は，Diessel（1999, 2006）及び，注意概念を用いた個別言語の研究が用いる枠組みに日本語指示詞を位置づけることを可能にする。佐久間（1951）以来長く研究が重ねられ，豊かな記述的伝統を持つ日本語指示詞研究の成果を通言語的な枠組みで捉えなおすことは，日本語指示詞分析の進展のみならず，言語類型論的な指示詞研究の枠組みの発展にも寄与しうると考えられる。

以上の分析において残された課題は，この「聞き手の注意の存在」を示すソ系と，ソ系のもう 1 つの直示用法である「聞き手領域指示」のソ系との関係を説明することである。従来「中距離指示」と記述されてきた用法を「聞き手の注意の存在」と分析することで，両用法が「聞き手」という要因を介して間接的に指示を行うという共通点をより明確にすることができた。しかし，「聞き手の注意の存在」と「聞き手領域指示」は連続性を持つものの，それらは本質的に異なる用法であると思われる。「聞き手の注意の存在」を「聞き手領域」に還元することには，少なくとも以下の 3 つの問題があるからである。

(24)「聞き手の注意の存在」を「聞き手領域」に還元することの問題点

a.「聞き手の注意の存在」を,「聞き手領域」を形成する一要因としてしまうと，堤（2012）が指摘したア系との交替可能性の問題を説明することができない。

b. ソ系の直示用法を「聞き手領域」という記述で統合した場合，ソ系の直示用法と非直示用法の連続性を説明することができない。

c.「聞き手の注意の存在」を手がかりとした指示は，基本的には視線追従による共同注意の確立であり，あくまで話し手の視点に基づく指示である。それに対し,「聞き手領域指示」は，話し手の視点を聞き手に投射した聞き手視点の指示であり，両者は質的に異なる。

筆者は,「聞き手領域指示」は「聞き手の注意の存在」を示す用法から派生した可能性があると考える[23]。Enfield（2009: 31）は, 指示詞がその体系に新たに意味を加える場合，それはより共同注意の確立に寄与する特定的な情報であり，最も一般的に付加されるのは空間的な情報であると述べている。「聞き手領域指示」が含む空間情報もまた, 聞き手に指示対象に関する手がかりをより多く与えるために,「聞き手の注意の存在」を示すソ系から派生したより特定的な情報であると考えられる。「聞き手領域指示」がより特定的であることは,「聞き手の注意の存在」を示すソ系はア系と交替可能であるのに対し,「聞き手領域指示」はア系と交替できないことにも表れている。

以上のように考えることで,「聞き手領域指示」と非直示用法というソ系の異なる用法を,「聞き手の注意の存在」を示す直示用法の派生的用法として統合することが可能になると思われるが, この点についてのさらなる分析は今後の課題とする。

参　照　文　献

Anderson, Stephen R. and Edward L. Keenan (1985) Deixis. In: Timothy Shopen (ed.) *Language typology and syntactic description, vol. III. Grammatical categories and the lexicon*, 259–308. Cambridge: Cambridge University Press.

バルプナル , メティン（2012）「トルコ語指示詞における非文脈指示用法と文脈指示用法について：文脈指示用法を中心に」『アジア・アフリカ言語文化研究』83: 89–116.

Broadbent, Donald E. (1958) *Perception and communication*. London: Pergamon Press.

Burenhult, Niclas (2003) Attention, accessibility, and the addressee: The case of the Jahai demonstrative *ton*. *Pragmatics* 13: 363–379.

[23]「聞き手の注意の存在」を示すジャハイ語指示詞 ton は，ソ系と同様に，発話場面で聞き手に近接する領域を指す用法をも持つ。Burenhult (2003) は, 本稿と同様に, ton においてこの「聞き手領域指示」は二次的な用法であるとしている。Burenhult（2003: 367）によれば，ton が聞き手に近接する対象を指すように見えるのは，聞き手に近接した位置にある対象には聞き手が注意を向けやすいことから生じた典型性効果（typicality effect）による。

Burenhult（2003）は，ton のこれらの用法を，聞き手にとって認知的にアクセス可能である（cognitively accessible）という記述によって統合している。筆者も，共時的にソ系を統合するのであれば, それは「聞き手領域指示」ではなく, 例えば Burenhult（2003）が提示した「認知的なアクセス可能性」のような，より広い概念であるべきだと考える。

Diessel, Holger (1999) *Demonstratives: Form, function, and grammaticalization*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
Diessel, Holger (2006) Demonstratives, joint attention, and the emergence of grammar. *Cognitive Linguistics* 17: 463–489.
Dunham, Philip J. and Chris Moore (1995) Current themes in research on joint attention. In: Moore and Dunham (1995), 15–28.
Eilan, Naomi (2005) Joint attention, communication, and mind. In: Naomi Eilan, Christopher Hoerl, Teresa McCormack and Johannes Roessler (eds.) *Joint attention: Communication and other minds: Issues in philosophy and psychology*, 1–33. Oxford: Oxford University Press.
Enfield, Nick J. (2009) *The anatomy of meaning: Speech, gesture, and composite utterances. Language, culture and cognition 8.* Cambridge: Cambridge University Press.
Fillmore, Charles J. (1982) Towards a descriptive framework for spatial deixis. In: Robert J. Jarvella and Wolfgang Klein (eds.) *Speech, place, and action: Studies in deixis and related topics*, 31–59. Chichester: John Wiley & Sons Ltd.
服部四郎（1961）「『コレ』『ソレ』『アレ』と this, that」『英語青年』107(8): 4–5.
服部四郎（1968）「『コレ』，『ソレ』，『アレ』と this, that」『英語基礎語彙の研究』71–80. 東京：三省堂.
林徹（1985）「トルコ語の指示詞」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』53: 55–57.
林徹（1989）「トルコ語のすすめ 3『これ・それ・あれ』あれこれ」『言語』18(1): 96–101.
金水敏（1999）「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6(4): 67–91.
金水敏・田窪行則（1990）「談話管理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3: 85–115.
金水敏・田窪行則（編）（1992a）『日本語研究資料集　指示詞』東京：ひつじ書房.
金水敏・田窪行則（1992b）「日本語指示詞研究史から／へ」金水敏・田窪行則（1992a），151–192.
Küntay, Aylin C. and Aslı Özyürek (2006) Learning to use demonstratives in conversation: What do language specific strategies in Turkish reveal? *Journal of Child Language* 33: 303–320.
Levinson, Stephen C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
Levinson, Stephen C. (2004) Deixis. In: Laurence R. Horn and Gregory L. Ward (eds.) *The handbook of pragmatics*, 97–121. Oxford: Blackwell.
Mole, Christopher (2011) The metaphysics of attention. In: Christopher Mole, Declan Smithies and Wu Wayne (eds.) *Attention: Philosophical and psychological essays*, 60–77. Oxford: Oxford University Press.
Moore, Chris and Philip J. Dunham (eds.) (1995) *Joint attention: Its origin and role in development*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum.
大藪泰（2004）『共同注意：新生児から 2 歳 6 カ月までの発達過程』東京：川島書店.
Özyürek, Asli (1998) An analysis of the basic meaning of Turkish demonstratives in face-to-face conversational interaction. In: Serge Santi, Isabelle Guaïtella, Christian Cavé and Gabrielle Konopczynski (eds.) *Oralité et gestualité: Communication multimodale, interaction*, 609–614. Paris: L'Harmattan.
Özyürek, Asli and Sotaro Kita (2002) Encoding of joint attention and distance in the Turkish and Japanese demonstrative system. Unpublished manuscript, Koç University and Max-Planck Institute for Psycholinguistics.
阪田雪子（1971）「指示語『コソア』の機能について」『東京外国語大学論集』21: 125–138.
佐久間鼎（1951）『現代日本語の表現と語法』東京：厚生閣.〔佐久間鼎（1983）『現代日本語の表現と語法《増補版》』東京：くろしお出版.〕
正保勇（1981）「『コソア』の体系」『日本語の指示詞』，日本語教育指導参考書 8: 51–122.　東京：国立国語研究所.
高橋太郎（1956）「『場面』と『場』」『國語國文』25(9): 53–61.
Tomasello, Michael (1995) Joint attention as social cognition. In: Moore and Dunham (1995), 103–130.
Tomasello, Michael (1999) *The cultural origins of human cognition*. Cambridge: Harvard University Press.

堤良一（2012）『現代日本語指示詞の総合的研究』東京：ココ出版.
吉本啓（1992）「日本語指示詞コソアの体系」金水敏・田窪行則（1992a），105–122.

資料

伊坂幸太郎（2012）『SOS の猿』中央公論新社.

執筆者連絡先：
〒 010-0825
秋田市手形学園町 1 番 1 号
秋田大学国際交流センター
mihirata@gipc.akita-u.ac.jp

［受領日　2013 年 8 月 10 日
最終原稿受理日　2014 年 9 月 28 日］

Abstract

An Integrative Analysis of Deictic and Non-deictic Uses of Japanese Demonstrative *So-* Using the Concept of 'Attention'

Miki Hirata
Akita University

This paper argues that the use of the concept of 'attention', introduced into typological studies of demonstratives around the year 2000, makes it possible to re-analyze 'medial' *so-*, which has been a continuing problem in the study of Japanese demonstratives, in such a way as to integrate its deictic and non-deictic uses. First, I will show that while, as Küntay and Özyürek (2006) suggest, the Turkish demonstrative *şu* encodes 'the absence of addressee's attention', the so-called 'medial' *so-* indicates referents that have already gained the addressee's visual attention at the speech time. Second, I will show that this analysis of *şu* and *so-* in terms of attention makes possible an integrated account of the deictic and non-deictic uses of both Japanese and Turkish demonstratives.